小論文

医学部（保健学科）

注意事項

一、「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。

二、この冊子は表紙を除いて四ページである。

三、「解答始め」の合図があったら、まず、掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数・下書き用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。次に、受験番号・氏名を必ず解答用紙の指定された箇所に記入してから、解答を始めること。

四、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に縦書きで記入すること。

次の課題文を読んで後の設問に答えなさい。

〔課題文〕

吃音（きつおん）には、二つの特徴的な点がある。

その一つは、「曖昧さ」だ。

（　中略　）原因も治療法もわからない、治るのか治らないのかもわからない。また、精神障害に入るのか身体障害に入るのかもはっきりせず、症状も出るときと出ないときがある。

そうした曖昧さを抱えるゆえに、当事者は、吃音とどう向き合えばいいか、気持ちを固めるのが難しい。改善できるかもしれないという期待は希望を生むが、達成されない時には逆に大きな失望に変わる。また、常に症状があるわけではないことは、周囲の理解を得るのを難しくする。

吃音がある人はおそらくみな、多かれ少なかれ、そうした狭間（はざま）に立たされ、心が揺り動かされている。それが、足元が常にぐらついているような不安感を生み出すのだ。身体障害者手帳と精神障害者保健福祉手帳の両方を、申請したら取得できてしまったという知人の言葉がその状況を象徴しているように思われる。

「吃音は、確かに障害だと、思って、います。でも、障害者手帳を、取得したということは、自分はもう、〝普通の人〟のように話すのを、あきらめてしまっているんだろうと、思います。どこかに、治せるかもしれない、と思う気持ちが、あるから、このように感じ、るのでしょうね。完、全に治らないと、納得できれば、障害者として、割り切って、生きていくことが、できると思うのですが……」

そしてもう一つの特徴は、「他者が介在する障害」であるという点だ。

吃音は、通常一人でいるときには障害にはならない。ほとんど常に他者とのコミュニケーションに関連して生じる障害であると

言える。どもる時に感じる苦しさは、言葉が詰まって言えないことそのもの以上に、相手に不可解に思われたり驚かれたりすることに対する恥ずかしさや怖さによる部分が大きいようにも思う。話した瞬間に、いつも相手に「どうしたんだろう？」と驚いた視線を向けられること、または向けられるかもしれないと恐れることは、人とコミュニケーションを取る上で心理的に極めて大きな負荷になる。それはコミュニケーションの内容そのものにも影響を与えるだけでなく、コミュニケーションに対する恐怖心をも植え付ける。そして一方、対話する相手にとっても、会話をしながら「どうしたんだろう？」と思うことによって、コミュニケーションの意味そのものが変化する可能性がある。話される言葉の中身以上に、相手の吃音症状に意識が向かってしまう場合があるからだ。すなわち吃音は、単に言葉のやり取りがスムーズにいかないというだけにとどまらず、コミュニケーションそのものの性質を変え得るものなのだ。

その二点が、吃音を他の障害とわける特徴ではないかと私は思う。どちらも、自分で制御することができないゆえの不安感を生み出し、それが吃音の苦しさの核心部分にあるのではないだろうか。

「曖昧さ」という点については、今後、吃音のメカニズムなどの解明が進めば解決されていく部分もあるだろうが、「他者が介在する」ゆえの問題については、社会に広く理解を求めなければならないため、とりわけその解消は容易ではないように思える。吃音当事者がただ、理解してほしいと待っているだけではおそらく何も変わらない。かつてに比べれば広く認知されてはいるものの、吃音とはどのようなものであるのか、どのように困っているのか、当事者それぞれが、積極的に知ってもらおうとさらに行動することがどうしても必要である。看護師だった飯山博己も生前こう話していたと、飯山の姉が言った。「吃音者が生きやすい社会を作るためには、自分たちが声をあげなければいけない。頭の中に浮かんでいる言葉が声に出せず相手に伝わらない苦しさを、当事者が発信していかなければならない」と。

そして同時に、私たち一人ひとりが、他人に理解されづらい障害や問題を抱えて生きる困難さや、「みなができることをなぜ自分はできないのか」という、誰にでもあり得る思いへの想像力を、少しでも広げていこうと意識することが重要であろうと思う。

それでも、社会に広く理解が行きわたることは決して容易ではないし、ではどうすればよいのかと問われれば、私はいま自信を

持って提示できる答えを持ち得ていない。

ただ、吃音と他者との関係について考えるとき、思い出す例が一つある。それは、大阪府の公立中学校で出会った一人の教員と生徒たちの姿である。

その教員、吉永章人は、二〇代半ばで、吃音があった。縁あって一度、彼が行う授業に参加させてもらう機会を得たが、授業の様子を見ていると、彼は、話しながら言葉がつっかえ苦しそうにすることが度々あった。どうしても言葉が出ないときは、白板に書くなどもしたが、その状況に対して生徒たちは、馬鹿にするような態度をとったり、疎ましそうにしたりすることは一切なかった。彼らは吉永が抱える問題をよくわかっていて、彼が次に発するまたは書く言葉を、静かに待っているのだった。その生徒たちの反応が、私には印象に残った。授業後、吉永はこう話した。

「いまも悩むときはすごく悩みますけど、最近ようやく、そんなに気にしなくてもいいのかもしれないと思えるようになりました。授業中、教科書をうまく読めないとき、生徒に『一緒に読んで！』って言うこともあります。保護者にも他の教員にも、自分の吃音については伝えています。迷惑をかけてしまうのは辛いですが、理解してもらえているのでありがたいです」

そして吉永は、子どものころに学校生活で苦労した経験についても教えてくれた。

「自分は小学校のときには不登校の経験もあります。学校生活にうまくなじめなかった人間なんです。でも、いろんな先生がいていいはずだから、一人ぐらい自分のような教員がいてもいいんじゃないかなって、そう思いながら、私はこの仕事をやっています」

メガネの奥の眼を優しく細めて話す吉永を見ながら、私は思った。きっと彼は、生徒たちが何かのときに心を開ける存在なのではないかと。自身の苦悩を正面から見せる吉永にだからこそ本音を言える。そんな生徒が必ずいるような気がするのだ。

また、スピードや効率ばかりが重視される現代は、大人も子どもも誰もが、待つことができなくなっている時代である。そうした中で、待ってもらうことを必要とする教員の存在は生徒たちにとって貴重に思えた。待ち、時間をかけるからこそ生まれる関係性、さらには寛容さがあることに生徒たちが気づかされる瞬間が、きっとあるのではないだろうか。

言葉を発することに時間のかかる吉永と、彼の言葉をじっと待つ生徒たちの姿を見ながらふと思った。吃音への理解が広がりさえすれば、吃音のある人だからこそいまの時代に果たせる役割があるのかもしれない、と。

この例が、何か具体的な解決策を提示するわけではないだろう。しかし、吉永の言葉とその教室内の風景に、何らかのヒントがあるようにも私は感じる。

だがそれでもなお、どもることは苦しい。当事者に、重く、執拗に、のしかかる。

七〇代で吃音のある男性が、ある日羽佐田竜二のもとを訪ねてきた。吃音を治すための訓練をしたいと言ったという。

羽佐田は答えた。年齢を考えれば、これからの人生の時間を訓練に使うより、吃音があるままでもご自分のしたいことに使う方がいいのではないですか、と。するとその男性はこう言った。

「残り、時間が……、少ないから、こそ、私は、訓練をしたいんです。死ぬ、までに、どうしても、思うように、話すという経験、を、してみたいの、です」

おそらくこの言葉にこそ、一〇〇万人の人たちの思いが詰まっているのではないかと思う。

出典『吃音　伝えられないもどかしさ』（近藤雄生著、新潮社、二〇一九年）

注一　常用漢字表を参照して一部にルビをふった。

注二　出題にあたり、問題文を一部改変した。

〔設　問〕筆者が吃音の特徴として述べている「他者が介在する障害」とはどのようなことか説明し、吃音の理解を広げる解決策についてあなたの考えを五五〇字以上、六〇〇字以内で述べなさい。